

さ さ き は る な
八戸工業大学第二高等学校 佐々木 陽菜



今回の研修の全体のスローガンとして、私たち6人が設定した『サスティナブル～ハッケン（発見・発券）しよう！夢の切符～』。これには、スウェーデン、フランス両国での施設見学や学生との交流を通して、エネルギーの現状に対する考えを深め、自分自身や周囲の人の意識を高めること、異文化理解に取り組むこと、新たなコミュニティや価値観を形成すること、そして、自分自身の夢への切符を発券できるような価値のある研修にすることなど様々な意味が込められています。私は、今回の研修で6人全員ともそれぞれにこの目標を達成できたのではないかと思います。また、私個人で設定していた目標も達成することができました。特に、エネルギー・原子力のテーマでの目標である「原子力発電とその処理に対する意識や考えをしっかりと聞いて学ぶ」と、現地高校生との交流のテーマでの目標である「たくさんの学生と交流して意見を聞いたり、お互いの文化や慣習を教え合ったりする」という2つは一番意識していたことでもあったので、しっかりと達成することができたと思います。

この研修会に際して、今まではあまり関心を持たず、知る機会も少なかったスウェーデンやフランスなどの海外のエネルギー事情について知ることができました。また、世界全体でのエネルギー問題についても学ぶことができました。

世界中で使用されているエネルギーの約8割以上が化石燃料であり、地球温暖化の進行を促進させています。その反面、地球温暖化の抑制やエネルギーの安定供給の確保といった観点から、世界各国では原子力を再評価する動きもみられています。

スウェーデンは、日本と同じく化石燃料が乏しいため、石炭や石油、天然ガスなどの供給は、他国に依存しています。一方で、豊富な水力資源による水力発電が発電電力量の約4割、原子力発電が同じく約4割と、化石燃料を使用しない環境にやさしい発電方法が発電電力量の中で高い割合を占めています。また、広大な森林地帯を持つという国土の特徴を活かし、木質燃料などのバイオマス発電も盛んです。そのため、スウェーデンの国内エネルギー自給率は日本に比べ非常に高く、2016年には71%に達しています。

フランスも日本、スウェーデンと同様に化石燃料に乏しい国であり、1973年に起こった第一次石油危機をきっかけにエネルギー安全保障の観点から、原子力の開発に取り組んできました。その結果、原子力エネルギーの増加とともにエネルギー自給率が改善し、現在では50%以上に達しています。また、発電電力量における原子力の割合は非常に高く、約70%超を占めています。どちらの国も、地震が少なく、比較的安全に原子力発電を行うことができるため、化石燃料に頼らず、自国でエネルギーをまかなうことができます。ここが、日本との一番大きな違いだと思いました。

施設の見学で印象に残ったのは、スウェーデンの「フォルシュマルク中・低レベル放射性廃棄物貯蔵所」です。フォルシュマルク原子力発電所の沖合の海底からさ

らに50mの地点に建設されており、地下には実際にバスで入ることができました。中は、本当にただの洞窟のようなところで、低レベルの廃棄物が実際にその岩盤内に貯蔵されていると聞き、少し驚きました。働いている人たちには何の影響もなく、安全面での心配はないということでした。この貯蔵所には、スウェーデン国内の原子力発電所から中・低レベル放射性廃棄物が搬入されており、現在、63,000m³ある既存の施設を、原子力発電所の運転期間延長、また、廃炉による廃棄物増量への対応を踏まえ、さらに108,000m³増設し、既存部分との合計で約171,000m³に拡大する計画が進められているそうです。これからわかるように、スウェーデンは原子力を重要なエネルギーの一つと考え原子力発電を推進し、利用を継続していく考えです。さらに、原子力発電を利用していく中での最も大きな課題である最終処分場に関しても計画が進んでいます。SKB社が、使用済み燃料の最終処分場としてフォルシュマルクを選定しています。これを聞いて、私が気になったのは、地元住民からの反発があったのではないかとということです。いくら地震が少なく比較的安全だからといって、事故がないとは言いきれません。そのことに住民は不安を抱くはずで、それにどう対応したのかというと、それは、あくまでも地道な対話による説得だったそうです。そうした地道な活動で住民からの信頼を得た結果、新たな施設の建設の目処が立っています。日本は、地震が頻発するといった地理的なハンデもあり、まだ、使用済み燃料の最終処分場が決められていません。しかし、今後、もし原子力発電を再開するとなったら、最終処分場の決定は必要不可欠です。スウェーデンよりも原子力に対する反発は大きいとは思いますが、地道な努力による理解と信頼を得ることが必要だと考えます。この施設を案内してくれた方が、「今、私たちが抱えているこの放射性廃棄物処理問題を、次の世代にまで引き延ばしてはいけません。今ある問題は、その世代である私たちが解決しなければならない。」と、言っていて、本当にその通りだと思いました。完璧なエネルギーは、今現在存在しません。もし、放射性廃棄物処理問題が解決したとしても、次の世代もまた新たな問題にぶつかるかもしれない。そうなったとき、やはり未来に持ち越さず、その代で解決することがとても大切だと感じました。

現地高校生との交流では、どちらの学生もエネルギーに関する知識があって、自分の考えもしっかり持っている人が多いと感じました。私の周りの高校生は、エネルギーについてあまり考えたことがない人がほとんどで、原子力について少し知っているとしても、福島第一原子力発電所の事故がきっかけです。私もその中の一人でした。それに対し、彼ら彼女らは、自国のエネルギーをよく理解し、将来のことを考えていて、私の周囲という狭い範囲で比べてもその差は歴然でした。自分が、今までどれだけ無関心だったのかを思い知らされると同時に、もっと知らなくては、いけない、考えていかなければいけないと思いました。

私は、今まで、原子力発電はメリットより、デメリットが大きく、危険なため止めるべきだと思っていました。それは、原子力発電のことを詳しく知らずに、TV

などから流れてくる情報から出た安易な考えでした。どんなエネルギーにもメリット・デメリットがあり、結局、どれかに頼り切ることはできません。今回の研修で、今まで悪い印象のあった原子力発電には、効率的にエネルギーを生産し、安定的な供給ができるという良い面があることがわかりました。そのことから、日本は、福島第一原子力発電所の事故から学び、安全面に最大限の配慮をしたうえで、原子力発電・再生可能エネルギー・火力発電を組み合わせたエネルギーMIXを進めるべきだと思います。また、もし可能であれば、少しずつでも火力の割合を減らし、先進国として地球温暖化への対策を講じていければよいのではないかと思います。私の考えが変わったように、正確な知識を得ることで他の人の考えを変えることもできます。福島第一原子力発電所事故の被害がいまだに残る中で難しいことではありますが、これからもっと先の未来を明るくするために、今できる最大限の取り組みをすべきだと思います。そして、今を生きる私たちは、エネルギーを無駄にせず大切に使うことを考えなければいけません。それが、私たちにできる最も身近で、簡単な取り組みです。

今回の研修で学んだことを周囲にも広め、自分の考えをしっかりとってこれから過ごしていきます。目標を達成し、実のある研修にすることができました。それをサポートしてくださった皆さん本当にありがとうございました。

